

挑 戦

し 続 け る

学 校



SOLAN

自立・自律した学習者のための教育をつくる



瀬戸SOLAN学園 初等部^[著]

CONTENTS

序章

いま求められる子どもの姿、教育の在り方

- ① 社会に求められる人材育成のために 6
- ② 資質・能力を育てる 8
- ③ SOLAN—その教育の特徴 10

第1章

SOLANの教育 3つの秘訣

- ① カリキュラム「習得」-「活用」-「探究」のスパイラルを織りなす5つの学習様式 14
- ② 個人探究を支える学習環境デザイン 16
- ③ 資源のフル活用 18

第2章

SOLANの教育 秘訣1:カリキュラム

- ① 「習得」-「活用」-「探究」のスパイラルを織りなす
5つの学習様式 22
- ② 習得① スキル・リテラシー
個別の知識や技能の習得 24
- ③ 習得② 教科学習
教科の知識及び技能の習得 30
- ④ 習得③ 教科学習(授業例)
豊かで確かな文章力を習得する書くスキル 32
- ⑤ 活用④ 教科型プロジェクト 38

6	活用③ 教科型プロジェクト(授業例 1) 2年生でもここまで自力読解できる	40
7	活用③ 教科型プロジェクト(授業例 2) 主体的・協働的な問いの設定への支援	44
8	活用④ 教科横断型プロジェクト	48
9	活用④ 教科横断型プロジェクト(授業例) 様々な展開を見せる教科横断型プロジェクト	50
10	探究⑤ 個人探究	56
11	探究⑤ 個人探究(実践例) 探究グループの活動の様子	66
COLUMN	SOLAN のカリキュラムを公立小で活かす	72

第3章

SOLANの教育 秘訣2：個人探究を支える環境デザイン

1	学びの創造空間	74
2	学びを支える ICT	78
3	教師のコンセンサス	82
4	サポーターをつくる	86
5	情報共有サイトをつくる	90
COLUMN	探究を支える学習環境をデザインする	94

第4章

SOLANの教育 秘訣3：資源のフル活用

1	保護者とのパートナーシップ	96
2	ICT の校務活用	100
3	授業づくりに専念するための人材配置	104
COLUMN	探究する子どもの伴走者たち	108

①	オーセンティックな探究的な学び	110
②	探究を中心に据えたカリキュラムの構築	113
③	学習環境の多様性・柔軟性・開放性	116
④	SOLANの学校文化	121
付章	SOLANの英語教育	124
	SOLANのめざすもの	126

序章

いま求められる 子どもの姿、教育の在り方

- 1 社会に求められる人材育成のために
- 2 資質・能力を育てる
- 3 SOLAN—その教育の特徴

1 社会に求められる 人材育成のために

理事長
長尾幸彦

SOLAN 学園（以下 SOLAN）は、社会で求められる人材を育成するために、めざす子ども像を「自立・自律した学習者」とし学校改革へ向けて挑戦を続けている。

◆社会で求められる人間像

経済産業省が 2022 年にまとめた「未来人材ビジョン」は、わが国のグローバル企業経営者の提言をまとめたものである。VUCA（不確定で先が見通せず混沌とした状態）の世界において、わが国の未来を託すべき人材の資質能力が挙げられた。

1990 年代から 2000 年にかけて IT 革命が起こり、新型コロナウイルスの流行時にはデジタル化が加速した。生成 AI やロボットの進化、DX（デジタル・トランスフォーメーション）の推進もあり、デジタル化は加速度的に進展している。

一方で、脱炭素化やカーボンニュートラルが世界的に喫緊の課題となってきた。このような時代の変化により、産業の構造や雇用の状況も大きく変化し、社会で求められる人間像が変わってきたのである。

次の社会を形づくる若い世代に対しては、基礎能力や高度な専門知識だけでなく、「常識や前提にとらわれず、ゼロからイチを生み出す能力」「夢中を手放さず一つのことを掘

り下げていく姿勢」「グローバルな社会課題を解決する意欲」「多様性を受容し他者と協働する能力」の 4 つの能力・姿勢が求められている。

これらは、与えられる教育や学習を受動的にこなすだけでは身につかない。根幹から意識や行動面での成長や育成が求められている。それは、批判的思考ができ、イノベーションを起こせる人材の育成が必要とされているということである。

◆迫られる学校の教育改革

2019 年に文部科学省が打ち出した GIGA スクール構想によって子ども 1 人あたりに 1 台のタブレット端末が導入された。これによって、学校現場での授業の様相は大きく変化した。子どもがタブレット端末を持つということは、たとえるなら百科事典が手元にある、いつでもどこでも、わからないことは調べることが可能で、知識を得ることができるということである。子どもたちは、生まれた時からデジタル技術が存在する環境で育ったデジタルネイティブの子どもたち。インター

ネットの普及と共に成長してきたため、例えば、スマートフォンやタブレット上のさまざまなアプリを活用して日常生活を送っている。いわば、社会での環境に学校環境が追いついた形である。私たち教師が育った子どもの頃とは劇的に違う。当然の如く今までの指導法が通用するはずはない。

加えて、多様化や情報化の進展、技術革新など、世の中の変化が加速していくなか、未来を生きる子どもたちに対して現在の教育の在り方でよいのか、とさまざまな分野から見直しや改善を行うべきであるという声も上がっている。例えば、生成AIの登場により、それをどのように授業に導入するか議論されている。以上のような社会の変化に学校現場はどのように立ち向かっていくのか、教師はどうあるべきなのかなど深刻な課題に直面している今なのである。

◆全国の学校の動き

今日の学校が目指す教育は、[生きる力]の育成を基本とし、知識を教え込む教育から転換した。子どもが自ら学び、自ら考える教育である。

2021年1月の中央教育審議会で「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～」が答申として発表された。

同答申においては「令和の日本型学校教育」の実現に向けて、これまでの日本型学校教育の良さを受け継ぎ発展させ、学校における働き方改革やGIGAスクール構想を強力に推進しながら、新学習指導要領を着実に実施することが求められている。また、学校における授業の中で「個別最適な学び」と「協働的な

学び」を一体的に充実することの重要性が示されている。

探究的な学習や体験活動などを通じて、児童生徒同士や多様な他者と協働し、他者を価値ある存在として尊重すること。さまざまな社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することが重要だとされている。

つまり、教師主導の授業から子ども主体の学びを重視し、さらに協働的な学びとの一体化へとパラダイムシフトしたのである。それは、本質的な意味で探究的な学びを行う方向に教育の転換が図られたということである。

学校現場全体が動き出すにはもう少し時間がかかるだろう。しかし、すでに先進的な教育を志向する私立学校や、長野県伊那市立伊那小学校や愛知県知多郡東浦町立緒川小学校といった公立学校では意欲的に取り組まれている。また、東京都渋谷区の全小中学校では、毎日午後の時間を探究学習に取り組むことにした。

探究学習が注目されている今、SOLANは2021年の開校当初より個人探究を軸にカリキュラムを構築し、実践に取り組んでいる。

SOLANの教育の方向性は、まさに世の中の流れとマッチしたものであり、自立・自律した学習者を育てるために今後も挑戦を続けていきたい。

2 資質・能力を育てる

三宅貴久子

予測不可能な社会を生き抜く子どもにとってどのような資質・能力を育成したらよいか学力観の見直しを図らなければならない。OECD が 2030 年を見据えて提唱した「ラーニング・コンパス」という学習の枠組みは大いに参考になる。

◆教師としての役割

2021 年 1 月の中央教育審議会答申『『令和の日本型学校教育』構築を目指して』では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」が着目されている。この背景には、近年における子どもの多様性、例えば、発達障害の可能性のある子ども、不登校や不登校傾向の子ども、海外にルーツをもつ子ども、特定の分野に特異な才能のある子どもなどについて、どのように彼らの学びを保証するかということである。しかし、もともと子どもは一人ひとりが個性豊かな多様性のある存在である。それがわかっていながらも、そこに踏み込んでいけなかったのは、教師主導型の授業が当たり前とされ、教師は知識を授けるもの、子どもは知識を授かるものという構図があったからである。授業では、「質問—応答—評価」の繰り返しが行われ、子どもは考える意欲を失い、学ぶ意味すらわからなくなる。

子どもがうまく学べないのは、子どもの側に問題があるのではなく、その環境に問題があるのではないか。学習とは、学習者自身が

知識を構成していく過程であり、知識は状況に依存している。そして、置かれている状況のなかで知識を活用することに意味がある。学習は共同体のなかでの相互作用を通じておこなわれるのである（久保田 2003）。

つまり、子どもは積極的に意味を見出すために主体的に世界と関わる存在であり、よりよい教育のためには、一人ひとりの実態に合った学習環境をデザインすることが重要なのである。そして教師は、学習者を支援する重要な役割を担うが、学習者にとっては多くのリソースの 1 つ、つまり学習環境の一部として存在するべきなのである。

◆子どもにつけたい力

OECD は 2030 年を見据えて子どもに必要な力は何か、そしてそれをどのように育成するのかといったことを検討して「ラーニング・コンパス」という学習の枠組みを提唱した。

ラーニング・コンパスは、子ども自らが、変革を起こすために、目標を設定し、責任ある行動をとる力を発揮するために進むべき道を見いだすことの重要性を比喩的に（羅針盤

として) 示すものとされている。つまり、子ども自身で「私たちの望む未来」へ向かうために使う「学習の枠組み」として位置づけている。この枠組みでは、単に知識やスキルの習得にとどまらず、不確実な状況における複雑な状況に対応するための知識、スキル、態度・価値の活用を含む概念としてコンピテンシーをとらえ、よりよい未来の創造に向けた変革を起こすため、①新たな価値を創造する力、②責任ある行動をとる力、③対立やジレンマに対処する力の三つを重視している。また、学習プロセスとして、学習者が状況に適応し、振り返り、必要な行動を起こし、継続して自分の考えを改善していく力、つまり見通し、行動、振り返りの獲得を提唱している(白井 2020)。

子どもは一人ひとり置かれている環境が違い、知識や経験も異なる。しかし、「よりよい社会」の構築という目的地を志向することは共有されるはずである。そのためには、読み・書き・計算などといった認知能力も必要であるが、人の心や社会性に関する力である非認知能力がこれからの時代には特に必要になっていくのではないだろうか。

では、そのような力を育成するためにはどのような学習環境が必要なのであろうか。

非認知能力を伸ばすには、子どもが何かに興味をもったり、課題意識をもったりすること、つまり子どもの興味・関心を引き出す学習環境が必要であらう。「これなに?」「なぜ、こうなるんだろう?」と、問いをもつことが考えるきっかけとなり、調べるための原動力となる。加えて、「こんなことに自分は関心をもっていたんだ」と自分の知らない自分に気づき、より深く自分を知ることになる。

そこから、子どもが興味・関心を伸ばして

いくためには、さまざまなリソースにアクセスすることが必須となってくる。そのためのツールが子どもの手の届くところにあることが重要になる。さらに、友だちや教師だけでなく、立場の違う人々と協働的に学び合う場も欠かせない。つまり、子どもの主体的・創造的な学びを生み出す場として、「活動」「人工物」「空間」「共同体」の視点から学習環境をデザインすることが重要になる(山内 2020)。

このような学習環境においてこそ、子どもたちは「一人ひとりの好き」ととことん追究する中で自分の強みを発見する。自分の学びを自分で創る経験、多様な立場の人々と協働的に学び社会とのつながりを見出す経験の積み重ねから、主体的・創造的に学び、探究、挑戦し、学び続ける姿勢を身につけていく。そこで培われる力は、課題解決能力、自己調整力、レジリエンス等であり、それらはまさに、非認知能力と呼べるものだ。これを目指すのが、探究的な学びであり、子どもが主体となる学習である。

SOLAN では、以上のような教育の動向を踏まえ、個人探究を軸にしたカリキュラムを構想し、実践している。

〈参考文献〉

- ・久保田賢一(2003) 構成主義が投げかける新しい教育. コンピュータ&エデュケーション, 15巻: 12-18.
- ・白井俊(2020) OECD Education2030プロジェクトが描く教育の未来. ミネルヴァ書房
- ・山内裕平(2020) 学習環境のイノベーション. 東京大学出版会

3 SOLAN

——その教育の特徴

三宅貴久子

SOLAN では当たり前の教育を問うという信念から、子どもファーストの学びの場としての学習環境をデザインし、授業実践に取り組んでいる。その際、子どもが主体的・創造的な学びを生み出す場を創るという視点を重視している。

◆教育の当たり前を問う

学校設立の準備段階から、私たちには「教育の当たり前を問う」という信念があった。「固定的な時間割は必要か」「なぜ、すべての学習内容が1コマ45分なのか」など、疑問を洗い出してみると気づくことがあった。すべては教師目線からの効果・効率を目指した枠組みであり、子ども目線で見直してみると「なぜ？どうして？」という問いが浮かんできた。また、子どもを取り巻く世界に目を向けると、貧困、紛争、災害など問題が山積し、どれも難解で複雑な問題ばかりである。このような予測困難な時代を生き抜く目の前の子どもには、課題に対して主体的・創造的に解決していこうとする態度を育てていかなければならない。社会情勢を視野に入れるとさらに様々な学校現場の矛盾が浮き彫りになってきた。

現在と未来に向けて、自らの人生をどのように切り開いていくことが求められているのか。また、自らの生涯を生き抜く力を培っていくことが問われる中、新しい時代を生きる

子どもたちに、学校教育は何を準備しなければならないのか。

以上のような現状を踏まえ、私たちは未来の教育の実現へ向けて改革に取り組まなければならないと考えた。ただし、一条校であるため、学校教育法やその他の法律により、その年限・目的等が定められている。しかし、その枠の中でも工夫すれば、もっと子ども自らが主体的・創造的に学びを生み出し、学ぶ意味を実感できる学習活動を組織できるのではないかと考えた。

そこで、子どもファーストの立場に立って学校教育を見直してみた。これが、SOLANメソッドが生まれた背景にある。

◆子どもファーストの立場で見直す

一般的に、国語、算数などの教科の枠組みで1コマ45分の授業が展開される。しかし、学習指導要領を分析し、教科固有の資質・能力及び汎用的な資質能力で分析していくと、大きく3つの学びの質に分類できた。知識及び技能の獲得を確実にを行うことをねらいとした「習得」の学習、習得した知識及び技能を

活用することをねらいとした「活用」の学習、子ども自身の興味・関心に応じた課題解決を通してこれからの社会に必要な資質・能力を育成することをねらいとした「探究」的な学習活動である。

子どもファーストとはいえ、漢字や計算などの知識及び技能や教科の基礎・基本の「習得」は、教師が主導権をもち、きちんと指導・支援を行わなければならない。しかし、「活用」－「探究」という学びにおいては、徐々に主導権を子どもに委ね、教科で習得した知識及び技能を使って課題解決をしたり、自分の興味・関心から見出した問いを課題解決していく活動にどっぷり使ったりして子ども自らが学びを創り上げる学習が考えられる。

また、学びは質の違いから時間設定も変えるべきではないか。なぜなら、計算・漢字などの覚える学習（「習得」）は短時間で集中して取り組む方が効率的であり、子どもの集中力も保持できる。そして、「活用」－「探究」といった主導権を子どもに委ねる割合が大きくなると十分な時間の保障が必須となる。なぜなら、子ども自らが思考し、学びを創り上げていく過程は試行錯誤の連続であり、自分の学びを調整しながら活動していくには時間が必要であるからだ。

以上のように、子ども目線で教科学習等を見直していくと、「習得」－「活用」－「探究」の学びの質に応じた時間設定をすることが重要ではないかという考えに至った。

◆ 学習環境をデザインする

「習得」－「活用」－「探究」という3つの学びのレイヤーには、学ぶ対象、学習の主導権、育成する資質・能力の違いがあり、それに応じた最適な学習環境をデザインすること

が重要である。「時間」だけでなく、どのような「活動内容」「道具」「場所」で、どのような「人」との出会いを準備したらよいかをデザインすることが教師に求められる。

GIGA スクール構想により、子ども一人ひとりに個別最適化され、創造性を育むICT環境が実現された。学ぶためのツールは教科書だけではなく、子どもたちは1人1台のタブレット端末を持っている。漢字・計算の習得においては、タブレット端末のアプリを活用することも効果的である。繰り返しの学習になるため、集中して学べる空間としては教室が妥当である。

一方で、活用となると子どもが調べたり、話し合ったり、発表したりしてアクティブな状況が生まれる可能性が考えられる。それに適した空間が用意されなければならない。子どもの手の届くところに自力で課題解決をするために必要な道具、例えば、調べるための図鑑や百科事典などに加え、まとめるための思考ツールなどの道具の準備も必要である。

さらに、探究となると子どもの活動は多岐にわたる。様々な機能を持った部屋、教室に限らず学校外の施設等、様々な空間が必要となってくる。それは、場所だけに限らず、人的リソースについても同様である。知りたいことを支援してくれる人的リソース、例えば保護者や外部人材などは、子どもの「学びたい！」をさらに掻き立てるために必須である。探究は一人ひとりが自分の学びを追究するため、学ぶ姿は多様である。それを支えるためには、教材の質だけでなく、学習空間や学習の共同体、学習活動のあり方などを含めて、包括的に授業実践を捉えていく必要がある。

以上のように、子どもファーストを実現するための要素としてカリキュラム、学習環境

デザインに加えて、保護者や外部人材の活用という資源の活用も行うことによって、子ども

もファーストの理想の姿である個人探究を実現できた。



学習環境デザインの考え方



身近に自然を体感できる学校敷地内の「SOLANの森」



廃校となった中学校の校舎をリノベーションしたSOLANの校舎



SOLANの森で探検する



森は子どもたちの最高の遊び場

◎著者紹介

学校法人 SOLAN 学園

瀬戸 SOLAN 学園 初等部

2021 年愛知県瀬戸市に株式会社立の小学校として開校。2023 年に愛知県より学校法人の許可を得る。

2025 年度 4 月には中等部が開校する。

建学の精神は、「グローバルシチズンシップの育成」。日本語や英語などの言語を駆使して多様な立場の人々と議論し合い、自らの意思によって持続可能な世界を築き上げる人材を育てようと自立・自律した学習者の育成を目指している。そのため、個人探究を軸に、英語教育や情報教育に力を入れている。現在は、1 年生から 6 年生まで、321 名の児童が在籍し、60 名の日本人教師と外国人教師で指導にあっている(2024 年 12 月 31 日現在)。

<https://www.seto-solan.ed.jp/>

◎寄稿者 (五十音順)

稲垣 忠 (東北学院大学文学部・教授)

小島亜華里 (奈良教育大学 ESD・SDGs センター・特任准教授)

泰山 裕 (中京大学教養教育研究院・教授)

吉崎静夫 (日本女子大学・名誉教授)

挑戦し続ける学校 SOLAN

自立・自律した学習者のための教育をつくる

2025年 1月 25日 初版発行

著者 学校法人 SOLAN 学園 瀬戸 SOLAN 学園 初等部
発行者 横山 駿也
発行所 株式会社 さくら社
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 2-20 ワカヤギビル 5F
TEL : 03-6272-6715 / FAX : 03-6272-6716
<https://www.sakura-sha.jp> 郵便振替 00170-2-361913

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

© 学校法人 SOLAN 学園 瀬戸 SOLAN 学園 初等部 2025, Printed in Japan

ISBN978-4-908983-81-8 C0037

*本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

*乱丁・落丁本は、送料小社負担にてお取り換えいたします。